

開催のご挨拶

後藤修司（全日本鍼灸学会会長、後藤学園理事長）

みなさまこんにちは。ご紹介頂きました全日本鍼灸学会の会長の後藤と申します。

6月にこの同じ会場で、全日本鍼灸学会と日本伝統鍼灸学会の共催によりまず学術大会が行われました。その際、「日本鍼灸に関する東京宣言 2011」というのを採択させて頂いて、これがあちこちで反響を呼んで注目されておりますが、具体的には日本鍼灸がどんなことをやれるのか、また、日本国内はもちろんそうすけれども、国際的に、どんなことができるだろうかなど色々なご質問等がございました。そういう中で、実はこの学会が終わった後、社会鍼灸学研究会（会長を形井先生がおやりになっています）が、非常にいい企画をお立てになっていました。それが実は「災害と鍼灸」でございます。

学会が東京宣言をした後にそういうテーマを突き付けられてきましたので、ぜひ学会として、特に「災害と鍼灸」を共催させて頂きたいということで今回の企画となりました。全日本鍼灸学会と社会鍼灸学研究会が共催ですが、実際的な中身については社会鍼灸学研究会さんがお考えになったものでございます。

まあそこに従来からちょっと関係がございましたアメリカの特に災害に伴うPTSDの問題をよく取り上げている協会がありましたので、その協会の創立者にお声をかけましたらぜひ、ボランティアで参加させて頂きたい、また、被災地にもボランティアで出かけたという話を頂きましたので、今回の企画が成立しました。

今とくに被災地における日本の医療と福祉は崩壊していると現地にいらっしゃる医療関係者からの報告です。その中で鍼灸がこれから非常に大きな役割を担う。現に今も役割を果たしていると聞くわけですが、このことを日本の皆様、特に行政の人達や政治家にちゃんと知って頂きたい。これは鍼灸師の為ではないんです。鍼灸が国民の皆様の健康にいかに関に立つのかということをはっきりさせる。このことが結果として鍼灸師の益になることだろうと私は思っています。

そして今、PTSDやうつ症状などについても、アメリカの軍隊なんかは全面的にこれを取り上げているという状況も、実はあまり知られていない。こういう情報が閉塞している状況は良くないので、何とかしようというのが今回のシンポジウムの主旨です。半日という大変短い時間ですが、先生方からご意見を頂きながら、今日の最後にはプレスの方達を対象にお話を色々させて頂くということも考えております。またご都合がよろしければおいで頂き、忌憚のないところをお聞かせいただければと思います。鍼灸は非常に力を持っていると思います。特に、日本鍼灸がこれから果たすべき役割、世界への貢献は非常に大きいと思います。

ぜひこのシンポジウムが成功裏に終わりますように心からお願い申し上げます。

形井秀一（社会鍼灸学研究会会長、筑波技術大学保健科学部教授）

みなさまこんにちは。お忙しい中お集まり頂きましてありがとうございます。後藤先生が大事なことはお話されましたので、わたくしは短くお話しします。

毎年社会鍼灸学研究会を行ってきまして、本年で6回目です。春どのような企画を立てるかと考えている矢先に東日本大震災がありました。これは社会鍼灸学的な視点から考えると、避けて通れない問題です。いな、むしろ、このような問題をこそ鍼灸がどう捉えていけるかを私たちは見なければいけない、考えなければいけないと思い、今年の会は一日目に、このような企画を行うことになりました。半日間ですが、災害と関わりを持って来られた先生方のお話をじっくり伺いたいと思います。

このテーマとは、これから長いかかわりを持ち続けるであろうと私は思っております。今回はそのスタートです。来年、再来年に向けて、鍼灸がどう関われるのか、という気持ちで聞きたいなと思っております。

それでは始めます。よろしく申し上げます。